## 浅見文庫本「備辺司関録」

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 駿台史学会
	公開日: 2012-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 神田, 信夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13378

## 浅見文庫本 「備 辺 司 関 録」

平一備 辽 戸 関 氦]

れいにファイルされていたが、出来るだけ速かにその出 atic Library) に浅見文庫という朝鮮本のすぐれたコレ 版されることを念願してやまない。 を訪ねた際には、タイプに打ったこのカタログは既にき られたのであった。偶々一九六三年五月、 た房兆楹(Fang Chao-ying) 係り、夙に三井文庫に帰していたが、戦後アメリカに渡 朝鮮法制史の開拓者であった故浅見倫太郎博士の蒐集に クションのあることは周知のところである。これはもと versity of California)の東アジア図書館(East Asi-ったものである。先年この東アジア図書館に勤務してい 一点一点につき簡単な解説をつけたカタログを英文で作 ークレー (Berkeley) のカリフォルニア大学 氏は 浅見文庫を整理し、 私が同図書館 (Uni-

さてこの浅見文庫の中に、僅か二十九葉の冊子の朝鮮

については更によく検討した上で述べたいが、要するに

当るが、内容から考えると癸亥ではなく、癸酉すなわち 亥の年次のみえるものが若干あり、癸亥とは天啓三年に 年のものが大部分である。ただ「副元帥草報録」には癸 年)、崇禎元年(戊辰、同二年)、同六年(癸酉、同七年) らはいずれも年月日のついた文書を集めて書写したもの 禎十七年)であるが、中でも天啓七年、崇禎元年、 及び清の崇徳二年(丁丑、崇禎十年)同六年(辛巳、同 ら成っているもので、もとより全体の書名はない。これ 写本がある。「備辺司関録」十二葉、「巡営関録」 崇禎六年の誤りであるらしい。この冊子の全内容や性質 十四年)、同七年(壬午、同十五年)、順治元年(甲申、崇 のようである。その年次は明の天啓七年(丁卯、天聡元 「副元帥関文及伝全録」八葉、 神 田 「副元帥草報録」 信 夫 六 六

係についての最も根本的な史料とい 対して講和の交渉がなされたことについては、 である。丁度この時期に、椵島の毛文竜の方から後金に 月付のものが二通入っている。そしてそのうちの一通は は 本書 に当り、丁卯虜乱すなわち後金の第一次朝鮮征討の は太宗の天聡元年及び二年で、 義州府尹への関ではなく、平安道観察使への関である。 月一日付と崇禎元年三月五日付との間に、崇徳六年十二 始まり、 た文書を集めたものである。天啓七年十一月九日付か 対清関係の記事を集めたもので、 その後継者に関する記事や、 が収録されているが、ただどういうわけか天啓七年十二 あることは間違 備辺司関録の記事は、 「満文老檔に見える毛文竜等の書簡につい て」 (朝 さて天啓七年から崇禎元年にかけてといえば、 この「備辺司関録」とは、 「備辺司関録」だけを紹介しておくことにする。 朝鮮の三国 ば 翌年の崇禎元年八月三日付まですべて二十四通 鮮 ,輯所 の椵島に拠つて権勢を振っていた毛文竜と いなかろう。 の関係を考えるのに最も根本的な史料で (載 におい 当時の朝鮮と後金と毛文竜の 備辺司より義州府尹に送 て述べ 清の入関前における朝鮮の ただ紙幅 朝鮮では仁祖の 、入関前の清 わねばならない。 たところである。 の関係から、 先般拙稿 五・六年 後金で 金, 道後 今回 関 6

> 事に相当する天啓七年十一月八日辛未の条をみると、 度欠けている。 があるが、試みに「備辺司関録」所収の第一の文書の の部分にかなりの欠落があって、仁祖五・六年の分は 極めて重要なものである。 承政院日記」 先年来韓国において出版されている 十九日、西犯天朝、合氷後、 ○接伴使書目、走回人王之橋所言賊情、奴賊九月二 また「承政院日記」にはその年次の記 の巨冊は、 しかし「備辺司謄録」 李朝後半期の根本史料として 欲東搶、深入取糧 備辺司騰 は初 ¢ T

た回録本ではあるけれども、関録の記事と比べて如何には、その本来の姿ではなく、一度焼失した後に改修されとあるに過ぎない。むろん現在の承政院日記のこの部分・北道而還云云事、以上朝報

簡

略であるか祭せられよう。

を快く許可された東アジア 図書館長ハフ(E. Huff)博た田川孝三博士、並びに貴重な本書の写真撮影及び鉛印方や句読の切り方その他について有益な教示を与えられが間とあるので、それらも注記しておいた。吏吐の読みおいた。さらにこの写本には誤写や脱字と思われるものを転載するに際し、句読を打ち、吏吐には傍線を引いてを転載するに際し、句読を打ち、吏吐には傍線を引いてない「備辺司関録」始めこの冊子の記事には句読が全

在二十九日間養兵西向云而深則八月出来不及親見是如為於入於及覆拜問則健廣地方今歲不全完荒但西化果數又漂入丞期 都督 路報張大秋以去 飲合衛作能首被治之地當此澤冬中難達動是白齊大祭連 中頂澤入以南北後方可得食来則當從止為云、事書扶據司 合水之後定為東擔之計伊威之言曰安州以北 敢無形去無野掠 慢情探許得伊威出沒形止伊無如前在此不知之整事不通路 司私連 除下是白有亦王之橋下言雖不可盡信而在我之道好 使副元帥義州府产康开以行會申筋何如天於七年十一月初分 副承肯臣尹知敬以知 路依兄 日新待愛是白在果真州軍其本非防守之計是白去寺鄉 備過可與蘇 威情最詳盡有不信俺言更問之橋所言可也仍與大秋 因回唐人王之橋九月二十八日目潘陽弘来 除下教接件使書我内都該二十九日ン

図版 備辺司関録第1葉

心から感謝する次第である。士、何かと面倒をみて下さった同図書館員由谷英治氏に

## 備邊司関録

没形止、 帥・義州府尹處、并以行會申飭何如、 當此深冬、決難遷動是白齊、大檗連續偵探、 軍兵本非防守之計是白去等、 雖不可盡信、而在我之道、 之後、定爲東搶之計、伊賊之言曰、安州以北□敗無形、去 西向云、而渠則八月出来、不及親見是如爲於、又於合氷 不至兇荒、但西犯累敗、又漂入寇期在二十九日間、發兵 日夕、 事、書状據司啓目、粘連啓下是白有亦、王之橋所言、 無所掠、必須深入以南、然後方可得食、來則當從北路云 問之橋所言可也、 備邊司爲知音事、 十八日、自瀋陽逃來、説傳賊情最詳盡、 天啓七年十一月初九日 右副承旨臣尹知敬次知啓、 都督啓報、 俾無如前茫然不知 之弊事、 仍與大秋反覆詳問、 張大秋以去、 節啓下教、接伴使書狀内節該、二十九 所當日新待變是白在果、 雖欲合屬於龍骨據險之地、 因日、 依允、 本道臨兵使・ 副元 天啓七年十一月初 唐人王之橋九月二 則縫虜地方、 右関義州府尹 爾不信俺言、 詳得伊賊出 今歳 義州

> 勢進退、無如前日之爲事、行移何如、天啓七年十一月十 臣、 六日、右副承旨臣尹知敬次知啓、 所可惜、意外之患難保、 據司啓目、粘連啓下是白有亦、見此状啓、孑遺之民、 備邊司為知音事、 と選集、受料者得免飢凍、無料者并能賑救、嚴愰保聚之 天啓七年十一月十七日 方爲料理爲白在果、唯只江氷已合、老弱還集者、 實非偶然、 誠爲多幸爲白齊、明春之計、 節啓下教、平安監司書状及府尹書状、 其必無連續偵探、謹其瞭望、 依允、 右関義州府尹 朝廷與軆(禮)

愰等處、并爲行移何如、天啓七年十二月二十九日、 承旨臣李閏次知啓、 入去之事、反覆開喩之意、金起宗・鄭忠信・申景瑗・嚴 去之意、開説是白在果、設有侵迫之患是白良置、 等似非專爲開市一事而來者、 使・義州府尹書状、據司啓目、粘連啓下是白有亦、 備邊司爲知音事、節啓下教、 天啓七年十一月三十日 而蘭英之行、想已過江、 依允、 関義州府尹 雖有出來商胡、必以爲此入 平安監司·副元帥 且十一月初一日、 平安兵 以蘭英 即是明 仲男

備邊司爲知音事、節啓下教、副元帥書状、據司啓目、

粘

報、 宗等處、 來緣由 値難便之弊、 不無窺覘之意、 連啓下是白有亦、 據書状內辭緣、 \$之意、 蘭英之還、 或有故差、 (胡) 金起宗已爲馳啓爲白有去乙、. 已爲行會爲白有如乎、今見鄭忠信・龍川府馳使 令一路各官善爲方便、 前者龍川 及義州府尹嚴愰馳報于本司文状爲白 府使辛曘馳報、 俾無相值之意 本司以 遲出 據莊承徳等出 來則 承徳等出 必有 金起 柏 來

之事、 乎矣、 紅者、 十日、右承旨臣金蓍國次知啓、 淹滞於直路之意、并入於移文中何如、 申飭爲白乎矣、 啓下公事善爲 路設撥、 通云者再次、 遼人乗時作擾是白昆、 則稱以唐撥出没、 必是莊承徳出來時傳通、 未知又是何等遼人是白乎妳 龍川馳報内、 既是承徳等謊説、 而所謂或領百餘、 大檗莊承徳等既已分明入島、 ]俾無相值之患事、 承徳等已入根島是如爲白有去等 徴責於一路者、 察其情形、 而林畔等處唐撥稱云、 或領二十云者、 依允、 而誤爲再出是白置 嚴愰處并以更爲行文 嚴愰馳報内、 或阻 天啓七年十 或是落在 攔驅出 而無設撥之 曽無馳 鐵山傳 青龍等 往來紛 月三 使無 依前

天啓七年十二月初 一日

関義州府尹

備邊司爲相考事、 槩丙子年、父母妻子被擄、 呈狀于本司曰、 矣徒等瀋陽替番軍卒以入往爲白在果、 節呈訓練都監軍卒鄭無赤等十名、 方在瀋陽是如爲白乎矣、 同贖 聯名

> 往 價、 非私商牟利之類、 十斤式、 尹極禁是如爲白臥乎所、 各別移文爲白只爲、 而手無寸錢、 貧不能辦、 許送事、 痛泣度日爲白如乎、 許令入送爲乎矣、 義州府尹處、 艱備枝三南草各と持往、 所志是置有亦、 情理参量、 知委施行向事、 每人各枝三南草中五 勿爲禁断、 適會矣徒等 相考爲乎矣、 而今聞 右関平安 許令入送 親自入 義州 府

崇德六年十二月日

道観察使

州府尹 巡營背関内辭縁相考渡送爲乎矣、 元関還上使事、

崇徳六年十二月二十六日在營

•

抄出金夢水等二人、 初 在虜中之人、必阻其逃還之心、 但己也、第萬死生還之人、今若鄉送、 義州府尹書狀、 備邊司爲知音 措解開喩之意、 四日、 崇禎元年三月初五日 右副 承旨臣李景憲次知啓、 事 嚴愰等處 據司啓目、 節啓下教、 必欲推還、 粘連啓下是白有亦 并爲行移何如、 平安監司 必以匠人為重 所係非細 依允、 不獨情 理之所不忍 副 崇禎元年三月 右関義州府尹 依金起宗分付 元 而其意不 逃還人中 兵使

右関義

守令申飭知委、 不能善處、 濟之語、 米豆暫留於獐子島、 備邊司爲相考事、 其意似是分給我人、 觀察使及嚴愰・龍鐵守令等處、 則方在飢餒之民、 分受之人先爲除出給虜之数、然後以爲賑 節啓下教、 設或麗民至饑困苦 不無一切吞食之弊、 以絶給虜之路、 司啓辭内、 并爲行移何如、 仍令陸續量 毛營咨文中、 若或如此而 令該邑 發接

**崇禎元年三月二十日** 答曰、依啓、右関義州府尹

馳啓事、 詳細 未便、 関 營 憲次知啓、 他物贖還爲白乎矣、 帯胡欲向毛營之説、 備 但王哥等已到九連城中、 是善爲揣摩、 粘連啓下是白有亦、 邊司爲相考事、 馳啓之意、 而李潔等曽無明白馳啓、 得其的報、 贖還人事乙良、 以待朝廷處置、 接件使處、 依允、 朴景龍豈能詗知、 并以行移爲白乎矣、 然後使之渡津爲當、 節 関義州府尹 見此金起宗等狀啓、 亦爲行會何如 王哥等去留情形、 極爲恠訝、 啓下教、 勿爲任他索價、 而當在江崖、 今雖指揮、 今此狀啓、 義州府尹書狀、 鄭忠信等狀啓中 龍胡之言、 當日右副承旨臣李景 王哥出來之事、 已無及矣、 開市一事、 則必須使人 及開市之事 極力周旋、 亦甚緩と、 所謂王哥稱有人 亦何可盡 據司啓目 嚴愰若或 事 . 禀於毛 或米或 亦甚緊 意 殊極 信 ح

崇禎元年三月二十一日

後臣起宗・臣俊書行見官禮、

都督手懸禮單物目日、

這們的厚禮何可當

再三稱説

接伴使臣以恭

亦随往、

坐未

處 往来 備 據司啓目、 承旨臣尹知敬次知啓、依允、 邊司 崇禎元年三月二十七日 、事情、 詳細 馳啓之意、行移何如、 `爲相考事、 探聽、 粘連啓下是白有亦、 及毛営所爲、 馳啓事、 節啓下教、 已爲行會爲白有在果、 令朴景龍等密と探聽於 胡人等 崇禎元年三月二十六日 関義州府尹 義州府尹 • 回荅官等 都督與奴 (賊脱力) 今此曲虎 相通事 書 左副 狀

良久、 陪臣、 職分、 中後、 月十 同狀内、 可也、 紀 得同坐打話 鎮江賊、 備邊司爲相考事、 今欲納欵請和、 九日四更量、 饋以酒肉、 又招張大秋日、 况天朝時未許和、 皆在此處、 使之跪現於楹外、 發向獐子島事段、 缝奴持汗書 你既細聞 所當與聞此間説話、 其所 還到島中、 節啓下教、 理宜聽許、第受命在外、 到島中要和事、 俺之所言、 和語、 而備陳云~、 俺决難経先處断、 都督曰、 曽已馳啓爲白有在果、 二十日朝招致故差、(胡) 平安監司•接伴使 大秋亦無由記得是白齊、 出於辭厳義正、 你既跳踉犯順、 及都督率兵丁、 俄而引入私室 而但事勢非 姑待朝廷處置 唯賊是討俺 ٠ 你國 積有年 叩頭 都督本 管餉 便 欲勦

之恩、 之資、 不已、 等新歳合有躬候衙門之禮、 舉措、 許之、朝廷既蒙老爺之諾、兩面民生、又感老爺快許贖還 阻事也、 之入来、 都督曰、斯言正是~~、被擄人一千餘名來到鎮江事、 禁断、視我弊邦(如屬#)赤子、無有(異與屬#)遼民、而今日 爺駐札弊邦、近十年、 廷輕信老爺之諾、 意歸虚套、 此間氣象、老爺亦當想得、况其父母妻子艱備、所贖之資、 及今米船見阻、未免還入處巢、渠皆叩心拊育、哭聲干宵、 唯望其族属之許贖、自以爲生還故国、 中米包、太半私穀、非官儲也、 移咨老爺、其後又送問安使李尚吉、 已聞之、 得達鎮江、死於道路者、幾至什居五六、幸而不死者、 而布 當初朝廷因被擄人 族属海西居民等、 因行茶禮、多論越海遠来之意、臣起宗・俊書日、 盡賣家業、 似拂民情、 兼修歳禮、 義州入送船運 政司爲此委來、 一則怨俺等不能善處、致有攔阻之患、 各備米石、 以老爺之高明、 欺了愚民、 豈有不知之理、 而且有不得已切迫事情、 從前如有弊及麗民者、則老爺嚴 深感厚意、 一半救饑民之穀、 而緣事故多端、 官家賃船入送、而今此攔阻 一則致憾老爺初許後阻、老 被擄等萬死之餘、駈策而 管餉使則前此有來見之 何不曲察此等事情乎 備陳曲折、 佈當更爲商量 復見父母妻子、而 訖未果焉、 呈狀于寡君 一半贖還被擄 蓋爲米船攔 老爺亦已 一則朝 俺 今 加

> 傳事意、 賊後、 所益叱不喩' 我國語者、 移駐蓋州之説、 議是白齊、第觀都督所爲、 則恐生異意、 還、退賊之後、則雖給米船、已無及矣、是與不許同 去而後出給、 將官等處支放是如爲白如乎、 不可憑信、 及兵丁等、 陳中軍将有貿船一事、於臣等從中力圖! 依命云≧、 爺更加深思、 還給之學、不待老爺分付、 都督招韓福、 設或得情、 使此人洞陳利害於中軍、 皆以爲今番掠奪米船、甚爲無據、 觀其辭色、 **姑辭而退、** 快放米船、 則龍義之民、其勢盡爲餓死、况本意専在贖 曽因守備時彦擧之言聞之、 恐非虚傳、陣中軍標下人韓福、觀都督所爲、似是断一局之意、四 似無快諾之意、臣等若更爲力争、 必在賊退之後、 似有許之、意、而所言本来不中、 欲於明日漸次善圖計料爲白齊 俾贖累千垂死之命、 卽見臣以恭委送 譯 官 奇 伯 而俺等已知之矣、 則中軍請見都督 一失事機、 則三船所載米叱 而島中若干將官 都督日 以此推之、 是如無不巷 素是通 則恐無 解

賊退後許入云≧、

臣等日、

今茲米穀雖専爲救荒、

若待賊

湾上事機、 誠甚可慮、厳愰等前来狀啓中、只言開市曲折、而不及胡 試 起宗等贈遺厚禮、交口相争、亦無肯許之意、湾上之事、 濤張變幻、 人討米之事、亦甚恠訝、金起宗等有明白更請之語、不出 粘連啓下爲白有亦、伏見前後狀啓、 而畢竟所得、 必有馳啓、而奇伯賢告目、先後入啓爲白去乎、 詳細馳啓之意、嚴愰等處并以行移何如、 以爲他日訛言之地、 我國糧船而止耳、 極可痛惡、至於米船、 誠爲痛惋事、 都督所爲、 據司啓 崇禎 皆是

崇禎元年三月二十八日

義州府尹

元年三月二十八日、左副承旨臣尹知敬次知啓、依允、関

備邊司爲相考事、

連啓下爲白有亦、

當初米船到泊之日、嚴愰趂即輸入、節啓下、義州府尹書狀、據司啓目、

備邊司爲知音事、

節啓下教、

南兵使書狀内節該、

加乙波

知愈使車徳昕今月初五日成貼馳報內、 事書状、據司啓目、 來匿藪云≧事、 執捉来到' 亦行會爲白去乎、此胡何以爲之爲白乎喻、 而奴地失農、軍兵盡爲飢困、 以土兵李大生等定送爲有如乎、 馳報、 即令通事問其來由、則當初慶源藩胡以掠 粘連啓下是白有亦、 據同所捉胡人二名、北青 前居北道資生、 胡人二名 本鎮賊路遮野項軆 遮野項係是越邊 速爲指揮 府 次以逃 賊 路相

如、崇禎元年四月廿三日、左副承旨臣尹知敬次知啓、依意、觀察使・北兵使・及 平安監・兵使處、 并以行移何矣、 今後乙良越邊行走胡人、 勿爲捉来事、 申節邊將之往来似爲宜當、多定軍人次と押送、俾無逃逸之弊爲白乎而道路甚遠、若未及交割、則轉送義州、使之交付胡差、而道路甚遠、若未及交割、則轉送義州、使之交付胡差、

崇禎元年四月廿四日 允、関義州府尹

元年四月十六日、同副承旨臣李基祚次知啓、依允、関義罰、而亦不可毎~請推、更觀日後所爲、處之何如、崇禎且此荅曲胡之 語甚是失對、 以 事軆言之、 則所當推考示是白在果、但嚴愰不待朝廷處置、先自分疏、極爲猥濫、有罪矣、毛將之反言、歸罪嚴愰、實爲無驗、其情不難知

崇禎元年四月十六日

州府尹

人毎以此事致詰於我、亦不無因此開釁之慮為白斉、今此、給價、則必爲難支之弊、金起宗之意、實有所見、但胡書狀、據司啓目、粘連啓下是白有亦、逃還人等、若欲一構邊司爲相考事、節啓下教、平安監司・兵使・義州府尹

以両國相和不可容受之意、

使之開諭、

當押鮮北来胡差、

則此胡人捉來之事、

` 令兵使覔給米塩'

旨臣李基祚次知啓、 為白置、 今後如有逃還者、 不可毎と如是、 以示相信 以此意行移何如、 使奴不至致疑、 時或留置本府、 依允、 唯在當事之臣、以定消息、 崇禎元年四月十六日、 関義州府尹 似為便當、 送言于胡中、 但此亦偶然為 随機善處 同副 言其實 承

走回

人段依金起宗狀啓、

發還原籍、

未有不可為白在果

崇禎元年四月十七日

江後、 儲 崇禎元年四月廿一日、 定砲射手、帯領押去、 但陸運則决不可為、 啓下是白有亦、胡人未准之數、 備邊司為相考事、 (弊嘅ヵ)、只送米船、別定守令中有計慮者、 足充其数、 而海路甚遠、 即為馳啓之意、 令本道監司與餉臣相議、 節啓下教、 運致無路、 以水路運送、而(不脱力)無如前日之 左副承旨尹知敬次知啓、 金起宗·成俊考處并以行移何如 如有搶奪之患、 府尹書狀、 議于該曹、 若是其多、 唯力是視、運到鴨 據司啓目、 急~運送為當、 只有結城倉所 為差使員、 則三縣會付之 依允、 粘連

崇禎元年四月廿 日

義州府尹

使書狀内節該、鐵山府使 黄璞馳報内、 自蛇浦昨 日寅時備邊司為知音事、節啓下教、平安監司・副元帥・平安兵

白乎喻 有亦、 海口、 稹元年四月二十七日、 餘名之多、 量 入去事情、 路上探問、 則在島中者、 漢人不知其數、 見金起宗等狀啓、 實為白乎喻、 軍兵則陸路出、 令厳愰詳密偵探、 後云、 探得馳報計料、 則云將帥移屯九連城、 盡為撤移白臥乎喻、 連二日出来者、 毛將乗船出来、 過向龍義之路為去乙、 左副承旨臣尹知敬次知啓、 故獜山了進去云と、軍兵等義州境 前則云、 急~馳啓之意、行移何如, 書狀據司啓目、 漢人之向義州者、 次以乗船、 不知其數、 則黄戸部去就何如為 所謂與 粘連啓下是白 使小通事送于 (虜將相會云 回泊于隣山 云不知其 依允、

崇禎元年四月二十七日

関義州府尹

連啓下是白置有、 付、 國以降隨二名 則到宣川逃躱、 自満浦下来云と、 該 備邊司為知音事、 日率兵丁、 龍川 旦 鐵山府使黄璞本月十六日成貼馳報內、 身彌島撥軍馳報内、 府使馳報内、 龍骨山城形勢看審後、 送于賊中、 又言降隨二名、 亦蒙兵来陣九連城、 名則去夜過向義州云、 節啓下教、 中軍莊衛徳及千摠杜奇稱名者來到 要功也事書狀、 蒙兵則来陣九連城, 平安監司 自京還送賊穴、 仍向義州事、 馬兵自満浦下来 何以諱之耶、 ٠ 、任都司セ科當・兵使書、狀内節 據司啓目、 馬兵則 而 時到 名

詳密、 訝 則義州昌朔等處、 元年五月二十一日、 形詳探馳啓之意、 人之耳 自北来胡到宣川 俾無如前之弊為白乎旅、任七科指向各為及那邊情代、我國機事不密、每と如此、實為可慮、今後十分代。 義州府尹厳愰處、 豈無馳啓之事、 右副承旨姜碩期次知啓、 纔到旋捕是白去等、 莊衛徳等之言、 并以行移何如、崇禎 其言已入於潦 依允、 誠為恠

崇禎元年五月二十二日

川府尹

上重任不可輕遊、 致被奪之悞, 已送一名、 備邊司為知音事、 粘連啓下是白置有亦 欲其留置、 厳愰慮有漢人被覔之患、 事機不細、 右副承旨臣姜碩期次知啓、 待胡差出来之時、 姑為降資、 節啓下教、 南道所投胡人二名、令轉送于義州 所當拿推治罪是白乎矣、 以懲其失何如、 平安監司書狀、 交付以去是白如乎、其 而不能臨事善處、 依允、 崇赬元年五 據司啓目 関義州府 此時湾 以

崇禎元年五月二十四  $\Box$ 

備邊司為知音事、 想已過宣鐵、 據司啓目、 粘連啓下為白有亦、 申景瑗必已迎、致上送是白在果、姜朴 節啓下教、 義州府尹 · 平安監司等書 以日計之、 仲男之

> 備給、 為行移何如 惟健俱在江辺、 國以兩班差送使臣云、而使臣親自持杖以打我人云、 使臣入来未久、吾等即為出来、 餉 為安挿之意、 等處分置人中、 人價物、 兩女之事、 而國約為兄弟之義乎云 < 是如為白斉、投老**七**等所捉逃還 而仍問日、今番使臣之行、 且彼中事情、 告目中説話、 令仲男相見、 無處置、則其疑訝必甚、 於湖南等處為白有去乙等、 不及来見、 使之相見事、 詰問数件事、 吳信男則已為拿 (囚腕ヵ)、 已為相約、成文以給矣、 自當據實言之、 説與則不為無益於執言之端是白斉、 以姜朴兩女雖淫奔逃去、 當日左承旨臣李聖求次知啓、依允、右関義 招問於太男處、 待景龍入来、 極為非矣、 其頭~數三男漢、 前日胡差下去時、 而其中緊言、乃逃還人不為屬還一事、 全羅監司・平安監司・義州府尹處、 臣等之意、 今番劃即知會星夜上来安定之 你國之議賢否如何、荅曰、 更為詳問、以為酬応為白斉 以此兩女之故、或疑他人之皆 而但同来之許多男婦、 則不過渠等入去之時接待餽 未得聞知云、 急と知委、 命可及上来、 今不可更議多少、 使之相見, 如全州・高山 吾輩許多人口、 則日、 給馬上来 金揩 而托病遲 皆分處 依此 是何 朴 聞你

崇禎元年六月二十一日

州府尹

口

意見、 偶一為之、不可每~如是、唯在當事之臣、 價難支之弊、 以此五人出来之意、 彼必謂我不信、 **覆啓行會為有如乎、** 粘連啓下是白有亦' 備邊司為知音事、 其所不知、 旋 以示相信、 若或来問 胡書中所言、 亦為言送何如、 恐無所妨, 與臣等之意相符、 使奴 會給已知者之價、 則易以為對、 則以酬荅為難云、 節啓下教、 亦專為此事、 言于彼中、 曾見金起宗狀啓、 金起宗處並以行移為白乎矣、鄭文翼 見此厳愰馳啓之辞、 (将脱力)不至致疑、 崇禎元年六月初八日、左承旨臣李 其所已知者、 義州府尹書狀、據司啓目、 論價高下、 其時或留置 不可無権宜善處之道 以示相信之意者 其意以為 備陳逃還人一と給 似為便當 並與隠諱 商胡等 随機善處事, 則使朴景龍善 逃還 送言于胡 所知五 不無 但此 者雖 則

崇禎元年六月二十八日

聖求次知啓、

依允、

右関義州府尹

備邊 船隻盘数掩荘、 義州不回 陳副摠手本内節該、 司為知音事、 貴國陪臣煩為轉行、 應援官兵備行本府 務要挑選精鋭兵、 如米賊 節啓(下脱カ)教、 達子三名指赴麗地、 到問船、 蒙此擬合移會、 義州節制使将臨江一帯船隻盡数 赴緊要處、 **俱蒙天朝調去** 毛都督接伴使書狀內、 為此合用手本前 背運米糧、 所截殺仍將臨江 擺運西 久住

> 精鋭兵、 義州、 白乎族、 人實有此来運米之學、 必是都督聞虚傳、 違越事、 島 蒙天朝調去、 掩荘、 令相阻為白乎妳、 亦為傳通于本道監司處、使之預為料理、 虚傳是如為白乎旅、 平安監司·義州府尹處並以行移何如、 雖有若干探聽船隻、 既令挑選精兵、 則仲男等往来之際、 不許泊留一隻、以阻夷人往来、 截殺運米、胡人云、胡人出来運米時 司啓目、 亦令義州府尹密探、 擺運西来、 船隻事則宜荅、 粘連啓下是白有亦 而有此令是白在果 常探問、 前赴義州、 則邊臣必已報知、 當依手本事意、 應援大兵去云と、 必有所妨、 如果選兵發送 毛兵前去、 則大将之令中軍、 都督已盡取去、 如米賊到問 第慮毛兵若果前往 都督令陳継盛挑選 今接伴使荅云 仲男回去時、 臨時掩荘是如為 而時無此報、 即為馳啓、 崇禎元年六月 而 而為馳啓 都 督遠在他 無是事、 所餘 似不敢 船 勿 胡 倶 宜

- 崇禎元年六月二十八日

尹

二十八日、

左副承旨臣姜碩期次知啓、依允、右関義州

府

知其贖還之意、而各給木疋口糧、若有父母妻子者、題給渠等必有怨望之意、宜令回荅使及義州府尹分明開諭、使死逃還、今為宗社生霊、不得已而送之、雖可以贖還、而備邊司為知音事、節啓下教、司啓辞、今此所送五人、萬

崇禎元年七月初九日 以慰其心、 即當敢啓、 荅曰依啓、 右関義州府尹

Ħ 別用意舉行、萬全護送、 昨以善為護送之意、 行と過我境、 備邊司為知音事、節啓下教、 崇禎元年七月十二日 検察事機、方便設策、 同副承旨李景容次知啓、依允、 並以更為移文知委、 啓 (下贈力) 是白有亦、 亦極可慮、况過鴨江之後、尤有難測之慮、 雖已行會、 施行何如、 俾無後 悔之意、 申飾一路守令・護送将官、各 見此狀啓、 平安兵使書狀、 而本道監兵使、亦量度形 右関義州府尹 崇禎 元年七月十二 仲男等及回答之 金起宗·黄緝 據司啓目、

崇赬元年八月初三日

後、 于唐将、 伴使處、 臣洪得一次知啓、依回啓施行為乎矣、 男出来、 鎮久已聞知、若終不言、 以老爺遠出未還故、今始告之云似當、 胡使或時出来、我國亦不得不遣使相報、 令接伴使、自以其意、言於都督曰、我國自覊縻之 其送来之由、 俾無相值之患事、 並以行移何如、 則大檗求刷逃胡耳、 崇禎元年八月初三日、右副 則都督必以我為隠諱、 亦為申飭、 胡兵出来時、 右関義州府尹 此意監司 此事初 頃者又遣仲 恐有不平 欲報 預通 承旨 '•接

知、

司・兵使狀啓、定州留置米為先入送云、更令催督、 辞以荅事段、 速為入送為當為白乎妳、 不必盡率来之意、開論似當為白乎旅、供饋糧太段、 之領兵渡来、 男護去軍兵、 府尹書狀、據司啓目、粘連啓下是白有亦、見此狀啓、 備邊司為知音事、節啓下教、平安監司・平安兵使・義州 別無他辞、 恐不必聽我指揮是白在果、但其数太多、 必不久出来是白置、 若督府詰問胡兵出来之由、 只當荅云、 幾名許令越江事段、 仲男出来已久、 使之 則何 見監

彼自来迎候耳云~、為當為白在果、仲男之来、